何よりもまず火を消そう

職場新聞〝きずな〟（四山）は訴える

去るも地獄残るも地獄

公害拡大招く社宅立退き

三池労組は、いま四山社宅立ち退きに反対して闘っているが、この重要な問題について、四山指導部五分会職場新聞〝きずな〟（NO・一四）は、次のように訴えている。

「去るも地獄、残るも地獄。社宅立ち退きに反対しよう」、と訴えた職場新聞〝きずな〟。まさに職場新聞は、命を守る闘いの武器になつている。

ところです。

荒尾・大牟田地区のマスタープランによれば、四山社宅、新港社宅は、昨年十月に工業専用地域に指定されたことになっております。だからいまだされている立ち退き要求は、単にA・B両地区だけでなく、さらに将来は残されたC地区も立ち退き要求がでてくることは明らかです。

三井アルミは、当初の三万二千五百トンの生産から、昨年五月に至って七万五千トン体制となり現在に続いておりますが、さらに十六万トンの生産計画を用意しているところです。

現在アルミ工場で使っている原料のアルミナ（一日千五百トン）の必要量が二倍以上になれば、原料を輸入する五万トン級の船を横づけする港が必要になり、すでに三池港の拡大が計画されているところです。

アルミだけでなく、この大きな港を利用する企業の進出が考えられ、大牟田・荒尾両地区は、今度の社宅立ち退き問題をきっかけとして大きく変化していくことは明白です。これでは、アルミの工場拡張を含め、今後の大きな変化は、私たち労働者・住民にとって市民のための市にとって、果たしてどんな利益があるのでしょうか。

公害と立退き

三井アルミのだすフッ化水素ガスは、第一次生産体制下の〇・二五PPDから、第二次生産体制下（昨年五月）の一五PPDとなっています。今後生産がさらに二倍にもなれば、右の経過から見て数十倍に拡大していくことが予想されます。

今度の社宅立ち退き問題は、マスタープランの一環として考えられていることながら、昨年の被害をきっかけとして、急に早められたものと考えられます。

被害に耐えられずギャーギャー騒ぐなら、側から離れろ、といっているのです。いかに金を持っているからといって、人間の生命や財産まで侵す権利がどこにあるでしょうか。

私たちは、憲法によって「健康で文化的な生活を営む最低の権利」を保証されているはずです。資本が「あっちにいけ、こっちにいけ」というのに、ただ「ハイハイ、そうですか」といっていたら私たちの安住するところはありません。もし火事があったら、誰でも逃げこそしますが、また、その火を消すことに努めるものです。

同じように、公害のひどいところに好んで住みたい、と思う人はいないでしょう。しかし、公害を容認し、A・B地区から退去したとしても、残ったところは容赦なき公害の返礼があるだけです。しかもそれは、ますますひどくなるのです。

去るも地獄、残るも地獄とはよくいったもので、火を消すことこそ第一に必要なことではないでしょうか。

「びんぼう人は麦めしを食へ」といって世を去った元池田首相は、高度経済成長（大企業優先、国民犠牲）政策を国民に押しつけ、それを受けついだ佐藤は〝新全国総合開発計画〟というこれまた国民犠牲・大企業本位の政策をとり、この結果海や山や空気、土地（田畑）は著るしく汚染され、さらに拡大されております。

いままた田中のいう〝日本列島改造〟計画が押しだされてきておりますが、これは公害のこれまで以上の拡散に他なりません。

とくに大牟田・荒尾地区は全国でも有数な公害サンプル都市といわれていますが、つい最近アルミのフッ化水素による植物被害が騒がれたところに、次には四山社宅の大量立ち退きと、アルミ工場の拡張が問題になってきたのは、みんなが激しい怒りで知っているところです。

職場の主人公は—われわれ労働者だ

西ドイツにおける、ニクソンのベトナム侵略反対大デモ。

ベトナムでは昨年末の和平協定に調印するかのようなぎまん的策動をもって、アメリカの大統領選挙を優位にしたニクソンは、クリスマスといえどこれまでにない北爆を続け、話し合いでなく軍事的脅迫でせまり、B五二やフアントムなどを使い、ヒットラー顔負けの皆殺し作戦を展開してきました。

しかしベトナム人民は団結し、ニクソンが、これまで撃ち落とせないと自信をもっていたB五二を、つぎつぎに撃ち落とし、多数の米パイロットを捕獲しています。

そしていまアメリカは、全世界から抗議を受け、ますます孤立し、さらに気違いじみた行動を展開しています。

これを受けて、田中自民党内閣は、日本をアメリカの肩替りにし、返還した沖縄へすかさず自衛隊を派遣、米軍と共同行動をとっています。

そして国民の生活をかえり見ない政策を打ち出し、国民から孤立しています。このことは昨年の総選挙でも明らかになったように、自民党支持が減り、われわれはますます有利になっています。

さらに職場では、三池炭鉱分離という合理化にそなえ、ZD運動を持ち込み、各人の作業量を拡大し、労働強化に追いこんでいます。すでに今年にはいって、宮浦鉱では負傷者が急増しています。このことを、会社はしきりに個人の不注意にしようと言っています。

職場のみなさん、職場の主人公はわれわれ労働者です。組織の別を乗りこえ、われわれの生活と権利をともに守り、今年もがんばりましょう。

×

宮浦指導部七分会新聞〝つなぎ〟（一月十六日発行）から。

なお〝つなぎ〟は、「南ベトナムからの訴え」として、次の一文（抜萃）を紹介している。

「……私たちは、サイゴンその他の牢獄に入れられています。なお、投獄されている人は約三十万人。そのうち二十万人が政治犯です。救援をお願いします」

〝訴え〟にこの協力者

ひき続き、全国各地・各職場からカンパを寄せられた機関や個人をご紹介し、感謝にかえさせていただきます。（敬称略）

×

全逼秋田市まなぶ友の会

富山県公営企業職員組合
大阪府堺中市　満木左記夫
加古川・高砂地区CO患者守る会（菅野逸雄）
兵庫県揖保郡　尾上　勝
東京都　安東優（元四山）

兵庫県評
松村康平
法政大学大原社会問題研究所
小竹勝則
松永義春
東京都　山口高司

東京都八王子市　武顕一郎
〃　平田春雄
〃　梅金一郎
〃　林田辰雄
神奈川県川崎市　与田和夫
〃　相模原市　酒井菊伝
東京都八王子市　立山寿幸
東京都　佐村正司
〃　山口高司（個人）
兵庫県尼崎市　駒井正

埼玉県　井口秀雄
明電舎労働組合大崎支部
東京都　酒井一博
静岡県　村山三雄

他に宮浦、三川、本所、港務の各指導部関係からも寄せられています。

連載小説

或る報復

三川岡浦益実

(15)

父の命を奪った炭鉱では、何事もなかったように煙突から黒い煙を吐いていた。石炭をまき上げる竪坑櫓の薬研が景気よくまわり、選炭機の音も相変らず活気に満ちていた。

それをみると強一は、いっそう父の死が哀れに思えた。

（何が三井さんのお陰か……）

三井さんのいる東の方には、足を向けて寝たことのない強一だったが、いまではカニが猿の尻を痛めつけて復讐したように、尻にでもどこにでも食いついてやりたい衝動にかられた。だが、途方もなく遠い東京ではどうする術もない。

強一は、父の死がくやしくてならなかった。悲しみとくやしさと、そして心細さの入り乱れた気持を雨で思い切りたたかれてみても、決して癒えるものではない。かえって惨めな気持になった。

すべての産業が、労働者の血と汗を吸いつくして利潤を生みだしているが、その中でもとくに炭鉱には災害はつきものだという、一種の諦めにに近い感情が根づいていた。死んだ者が運が悪いということで、誰もが無理に納得しようと努めていた。

「可哀そうに……」

犠牲者に対する同情と、憤りの涙は惜しまないが、それだけにとどまっていて、どうしたらこのような悲惨な繰り返しを無くすことができるか考えなかった。

いや、たとえ考えたとしても、それを口にだしたり、行動に表わしたりすることをはばかった。勝手に首を切られても、文句一ついえない時代だった。しかし、それだけではない。

明日はわが身という戦りつが、一時は全身をかけめぐることはあっても、腹の底にはやはり、いくら災害が頻発するからといってもまさか自分に、命を落すような悲劇が訪れようなどと、思ってみなかったに違いない。

自分のこととなると、たとえそれが想像の世界であっても、自分自身の運命は、どうしても安全な場所に置きたがるのが、人情というものだろうか——。

「強一、雨にぬれてどこさん行こるか」

強一は、ふっと父の声をきいたような気がした。

こんな雨の日には、作業着のまま通勤する父に傘を持って行くのは強一の役目だった。

黒い布の坑内帽子を被り、切先のとがったツルハシを肩にした父から、エヂソンバンドに通した空の弁当箱を雨傘とひきかえに受取り、それを振りまわしながら父とならんで帰った。

坑内からあがった父の地下足袋は、いつもぬれていた。

（おとっちゃんが炭鉱で働かんなら死なんでよかったかも知れん、危なか所で仕事させられんじゃったなら……）

強一の足は、炭鉱電車の鉄道にさしかかって停った。

暫く、鉄道の土手を哀しく見上げていた強一は、思いつめたような眼差しで登りはじめた。

雨にぬれた草に足をとられ、下駄の鼻緒を切った。